

高齢者がいきいきと活動する「老人クラブ」は、60歳以上の人が自由に加入できる団体。健康、友愛、地域の助け合いなどを柱に活動をしています。近年、加入者が減少していますが、会員数が少なくなる中でも活発な活動をしている団体が多くあります。今月号の特集では、地域で活躍する老人クラブの活動を紹介します。



高齢者の 元気は 地域の元気

老人クラブ会員募集中

【子どもの登下校を安全に】

「ここは手を挙げて渡ろう」と横断歩道の前で声が響きます。通勤や通学で交通量が多くなる平日の朝と夕方。飯島クラブの皆さんは、時に大きな声を出して子どもたちの安全を守ります。

「飯島クラブでは、子どもの見守り運動をしています。子どもたちには安全に登下校してほしい」と話すのは、同クラブ会長の細木卓さん。10年以上、学校がある日はほとんど毎日、登下校の見守りを行っています。

交通指導員も務める細木さんは「子どもの安全を守る活動は生きがいになっています」と活動への思いを口にします。

細木さんをはじめ、このクラブで見守りをする皆さんは、自分の孫が小学生になるのを機に、活動を始めたと言います。

同クラブ副会長の細木武夫さんは「周りの危険を考えながら、約1kmの距離を朝と夕方2往復します。そうすると健康のため、良い運動になりますよ」とうれしそうに話します。「孫みたいな元気な子どもと関わるのはとても良いです。私が

教室や児童交流など さまざまな活動があります



▲水墨画教室。指導はクラブ内の会員が講師となっていて行います。教室が終わるとお茶会が開かれます。(水墨画クラブ)



▲陶芸教室。バケツリレーのように釜へ作品を運ぶ皆さん。指導役の先生がいるので初心者が安心して取り組みます。(陶竹斎クラブ)



▲南小学校の児童を対象にした「ふれあい森林教室」。記念植樹やシイタケの植菌体験などを行っています。(吉田寿会)



①



②



③

①横断歩道を渡るときは、旗を使って車に通行を知らせます。②見守り隊が車道側を歩きます。③活動中は見守り隊の帽子を被って、黄色い旗を持ちます。



細木卓会長

元気でいられるのはこの活動のおかげです」と笑みがこぼれます。この見守りが日課になり、活動の度に子どもとふれあうことで元気がもたらえていることが分かります。

子どもが元気である一方で、見守り隊には気をつけなければならぬ場面があります。「狭い道や横断歩道を渡るときなどは特に注意が必要です。子どもは話しに夢中になって周りに注意がいついていない場合があります。

「車が止まってくれた時は必ずお礼をするように教えます。本当は、もっとゆつくり話をしながら歩きたいけれど、その余裕はありません」と責任感を持って取り組みます。

7年間見守りを続けている原田彰さんは「現在、このクラブでは5人程度で見守りをしています。もう少し見守り隊の人数がいると安心できる」と少し不安そうな顔を見せます。それでも、子どもの先頭を歩く姿からは、少ない人数でも思いをもって取り組みを続けていることが伝わります。

地域の高齢者が、子どもを思うような活動が安全な登下校を支えています。



【地域の元気のため】

広瀬町比田で行われる3世代交流の軽スポーツ大会。この中のグラウンドゴルフ大会は、10年ほど前に比田中央寿会の山本善正（よしみ）会長の発案で始まりました。山本さんは60歳から同会に加入。現在まで、約10年間会長を務めています。

3世代交流活動を始めたのは、「地域のつながりが薄くなっていると感じ、それぞれの世代が一緒になって活動をする機会を持つことが必要だと思い、企画しました」と山本さんは振り返ります。

現在は、交流センターが主体となっていく軽スポーツ大会は、各世代の人がバラバラになつてチームを組みます。こうすることで世代間の壁をなくし交流が深まります。「毎回、50人〜60人が参加されます。子どもとふれあうことで高齢者は元気をもらえます。高齢者が元気



山本善正会長



▲世代を問わず楽しめる軽スポーツ。地域の人々の元気な姿が見られます。

になると地域が元気になると感じます。この活動は皆さん喜んでおられますよ」と笑顔を見せる山本さん。子どもとの関わりを大切にしていることが伝わってきます。

同会では、3世代交流のほか、交流センターや学校の行事に参加し、小学生や専門学生との交流を行っています。比田小学校の児童とは、安来港でのゴズ釣りやとんどさんを行います。安来の自然を感じる経験や伝統文化を教えることは、子どもに学校の外で学びを与えることができます。

島根総合福祉専門学校の学生と行うのは、地元の人との交流授業での農業体験。田植えから収穫までを経験します。田んぼに入つて苗を植える作業や鎌を使った収穫の際には指導に力が入ると話す山本さん。「こうし

交流の楽しさと収穫の喜びを

西松井町にある「ふれあい農園」では、楽しそうな笑い声が広がっています。ここは、安来市老人クラブ連合会安来支部の会員27人で管理している農園です。

昨年からはふれあい農園で作業をしている高木浩さんは現在、安来市老人クラブ連合会の副会長を務めています。

高木さんは「ここは体を使って作業ができるので良い健康づくりになります。また、自分の手で作業をして、その後、収穫という成果が現れるのでとても楽しい。生産活動の良さを感じることができます」と魅力を話します。

賑やかに活動するこの農園は、老人クラブの会員同士の交流の場となっています。

▶作業をする高木さん（右から2番目）と農園の皆さん。



◀冬場はモモ・ブドウの木のせん定をします。農園横には作業場があり、そこで研修会や昼食会をして交流を深めます。





▲高齢者宅を訪問する石川会長（中央）と会員の皆さん。

た活動の魅力は子どもたちの成長を見られるところです。子どもは地域の宝。一緒に活動して大切に守りたい」と思いを口にします。

老人クラブの活動を始めて25年以上が経ち、「娘からは体を心配され、辞めることを勧められます。しかし、子どもたちや地域の元気のために無理のない程度に動ける間は続けたいです」と力を込めます。

長年続ける活動の裏には、子どもや地域への熱い思いがありました。

【この地域での暮らしを守る】

伯太町赤屋の赤屋高齢者クラブでは、1人暮らしをしている高齢者などの訪問を行っている。こうした動きの背景にはある思いがあります。「1人暮らしになっても赤屋に住み続けたいと思う人の手伝いができれば」。こう語るのは同クラブの石川英夫会長。石川さんをはじめ、同クラブのメンバーは日常的に近所の高齢者に声かけを行っていました。そして、3年前に老人クラブとしてこの活動を始めることにしました。

赤屋地区のような山間部は、降雪や交通など、この地域ならではの困りごとが多いのが現状。それでも「お盆前の墓掃除や草刈り、時にはバス停までの送迎をしたこともあります。私たちの活動は、年をとっても赤屋に住みたいと思う人の大きな手助けになっているんじゃないかと思っています」と石川さんは自分たちの役割をうれしそうに教えてくれました。

同クラブ事務局長の板倉昭昭さんは、「小さな困りごとを相



▲赤屋高齢者クラブでは、年に1回、活動写真などを載せた文集「ふれあい」を発行しています。

談してもらえよう一言声をかけるだけでも続けることを大切にしています」と話します。一人で暮らすことに不安を感じている高齢者にとっては話をするだけでも安心感を与えられます。訪問先の人からは、「山奥の家まで話をしに来てもらえることはありがたい。元気ができます」と感謝されると言います。

赤屋地区は平成29年2月に「あかやてごする会」が発足しました。これを機に「老人クラブだけの活動では限界があった。今後は、この会と一緒にやって高齢者の訪問を続けていきます」と石川さんは気持ちを新たにします。

グラウンドゴルフや手芸などの娯楽活動の他にも老人クラブは地域で活動をしています。人々に笑顔を届けるその活動には、地域を盛り上げる元気な高齢者の姿があります。

市老人クラブ連合会は、各支部で地域の特色を生かし、地域に根ざした取り組みを展開しています。

安来市は、高齢化率が35%を超え、市民の3人に1人が65歳以上という状況です。市は平成30年3月に、「第7期安来市高齢者福祉計画・介護保険事業計画」を策定しました。計画の中で老人クラブは、地域共生社会の実現に向け、社会参加と生きがいづくりに大切な活動であると位置づけています。

高齢者の皆さんが元気に活躍されることこそが、地域社会を支える大きな力になると考えています。



福祉課 高木課長

問い合わせ

安来市老人クラブ連合会事務局（ふれあいプラザ内） ☎ 28・6477